

保育者養成校学生による理想の保育施設像に関する一考察

—保育実習指導の授業実践から—

伊藤 喬治 松本 亜香里

「主体的対話的な学び」を保育において掲げるのであれば、保育者養成段階の学生においても同様の姿が望ましいであろう。つまり、保育者養成に関する論文や学会発表で散見される「受け身」の学生像から脱却し、自ら考え作り出す楽しみを感じ、自分の理想を掲げ他者の意見を受け止め、そしてお互いに高め合うことのできる対話力を身につけることのできる学生像への転換が求められる。そしてそのための授業運営と実践的手法の工夫が必要であり、実習指導においても同じくそのための実践的手法が課題として挙げられる。そのような課題に対し、我々は、保育者養成を行う短期大学の2年生を対象に、保育実習指導Ⅱの中で、2年間の実習指導および保育に関する授業で構築した知識や思考のまとめとして学生に「自分が保育施設を作るとすれば、どのような園を創りたいか」と問いかけを行った。

本稿では、保育実習指導の授業内で行った課題から、学生の考える理想の保育施設像について検討を行った。そこから、学生が考える理想の保育施設の特徴として、「自然と触れ合う機会の提供」「地域社会との関わり」といった抽象的かつスローガ的な要素を多くの学生が挙げる傾向が見られた。また、理想の保育施設の園舎や施設設備の特徴といったハードウェアの部分についても、理念や行事などといったソフトウェアの部分についても、理想の保育施設像として具体的な姿で語られる部分については、学生が学内外の授業や実習等で体験したことがモデルとなっていると考えられるケースが多く見られた。そこから、自らの保育実践を省察し問い直していく前提として、理想の保育施設像についての具体的なイメージを在学期間中に確立していくためには、それまでの間に多様な保育施設と保育実践に触れ、また課外活動や自主実習も含め、広範囲にわたって多様な知見を蓄積していることが必要であることが明らかとなった。

1. はじめに

本研究の目的は、保育者養成を行う短期大学の学生を対象に、学生が考える理想の保育施設像とその特徴について明らかにすることである。本研究に至る経緯として、近年の保育環境に関する動向が挙げられる。言い換えれば、昨今、物理的保育環境の構成についての議論と実践が改めて活発になってきていることである。たとえば、宮里(2018)や仙田(2016)のような、これまでの園庭—園舎—保育室といった、パッケージ化され、箱庭的に

用意されたいわゆる典型的な保育環境だけではない、よりダイナミックな物理的環境の構成や地域との関係についての議論や実践が蓄積されつつある。このような保育環境への問い直しは国内だけではなく、諸外国においても同様にあり、筆者は 2016 年の研究において(伊藤、2016)、ノルウェーの幼稚園がレッジョ・エミリア・アプローチを通して物理的環境構成の積極的な活用を行っていることを明らかにした。このように、近年では保育環境についてより広い視点から捉えたもの、つまり保育者の保育思想・哲学、理念、価値観を反映する対象として、保育施設のソフトウェア的側面だけでなくハードウェア的側面についても、より積極的に問い直される議論や実践が増えている。

では、実際に保育を学ぶ学生たちは、保育について学んでいく中で、自身の保育の理想像についてどのようなイメージを形成しているのか。これまでの研究では、山鹿ら(2019)は学生のマインドマップと言葉の分析から、学生が考える理想の保育者像について検討を行っている。鳥丸(2019)は、理想の保育者像が保育者養成校での授業を受けていく中でどのように変化していくのかを、こちらも学生の記述する言葉の分析から実証的に明らかにしている。また菊野ら(2018)は、理想とする教師像と、それに関連する性格の点から検討を行っている。このように、これまでの研究においては、理想の保育者像や理想の教師像について扱った研究については複数見られるものの、保育を学ぶ学生がイメージする理想の保育施設像についての研究は、特に近年の保育環境の問い直しの文脈からは積極的には行われてこなかった。そこで本研究では、保育者養成校の学生を対象に、保育実習指導において行った理想の保育施設像についてのレポートから、学生の持つ理想の保育施設像を明らかにする。

2. 方法及びカリキュラムの特徴

本研究では、A 短期大学の 2 年生を対象とした保育実習指導Ⅱの授業において、理想の保育所について検討を行うアクティブラーニング等を行ったうえで、最終課題として指定の様式にて求めた、理想の保育施設像についてのレポート課題を研究対象とする。このレポートを分析することで、学生が考える理想の保育施設像について検討を行う。

ところで、本研究の検討に入る前に A 短期大学のカリキュラム上の特徴について述べる。A 短期大学では、幼稚園教諭二種免許と保育士資格に加え、児童厚生二級指導員の資格を取得することができる。幼稚園教諭二種免許のための教育実習については、1 年次 2 月に幼稚園教育実習Ⅰを 1 週間、2 年次 6 月に幼稚園教育実習Ⅱを 3 週間行っている。保育士資格のための保育実習については、保育実習Ⅰ(保育所)を 1 年次 3 月に 2 週間に行い、保育実習Ⅰ(施設)を 2 年次 8 月に 10 日間行っている。これら保育実習Ⅰについては保育士資格取得を目指すすべての学生が必修となっている。しかし、2 年次 9 月に行われる保育実習Ⅱについては、2 年次 8 月に行われる保育実習Ⅲと選択となっており、児童厚生二級指導員資格の取得を目指す学生は保育実習Ⅲを履修するため、児童館での実習を 10 日間

行い、保育所での実習は保育実習Ⅰ(保育所)の2週間のみとなっている。今回、保育実習Ⅱを履修した学生は、2年生51名のうち、19名であった。

上記の履修における特徴のため、A短期大学では保育所における実習が保育実習Ⅰのみとなる学生が半数以上となっており、またこのような状況から実習指導の授業においても、保育実習指導Ⅰが実習に関する基本的な部分をカバーし、保育実習指導Ⅱについてはより発展的・応用に関する部分を取り扱うよう設計されている。具体的には、保育実習指導Ⅱにおいては、言葉かけの語彙や子どもを観察する視点に関するグループワーク、また読み聞かせの実践と相互評価といった、少人数ゆえの実践的な内容を中心に行っている。保育実習指導Ⅰが実習日誌や保育指導案の作成といった、学外実習を想定したテクニカルな内容が中心となった一方で、保育実習指導Ⅱにおいては、特にこれまでの授業内容を統合し、学生一人ひとりの保育についての実践的スキルを伸ばす一方で、それらの基盤となる自身の保育思想・哲学についても意識することを目指した。そこで、保育実習指導Ⅱの授業の後半では、実践的な内容に加え、先述のとおり理想の保育所について、物理的な環境構成や人的環境構成、日々の保育の内容の特徴について、複数週にわたって検討する機会を設けた。そして保育実習Ⅱと事後指導を終えたうえで、2年次の最終課題として、今回検討する理想の保育施設像について学生に検討させた。

今回、学生に理想の保育施設像として求めた項目については、実習日誌における「実習園の概要」を参考とした。「園名」「種別」「所在地」「沿革と運営の理念」「園の特徴(方針・年齢対象児人数・地域の特色など)」「園の見取図」「年間行事など 一年の生活の流れ」「特記事項」とし、これまでの実習の経験から馴染みやすく、想像しやすい項目とし、これらの視点から理想の保育施設像について検討させることとした。「種別」は選択ではなく空欄とし、幼稚園、保育所、認定こども園、認可外保育所など、自由に考え、決めるものとした。「所在地」については都市部か郊外かの選択とした。それ以外の項目については、自身の学習や実習、経験をふまえ、自分なりに自由に記述するかたちとした。課題については、履修者19名全員が提出した。

3. 学生の考える理想の保育施設

3-1. 種別

種別については、保育所が16、認定こども園が3であった。

3-2. 所在地

所在地については、都市部が8、郊外が10、無選択が1であった。

3-3. 沿革と運営の理念

「地域の子育て支援を行う」「地域の方々と連携する」「地域とのつながりを大切にする」「地域の方々と交流を行う」といった、地域社会や保護者との連携に関するものが複数の学生から理念として挙げられた。

都市部を選択した学生からは、特に「自然・四季の変化に触れる」「自然とのふれあいを大切にする」「自然に触れ合える環境を整備する」といった自然に関するものと、また、「のびのびと生活する」「思い出に残る保育を行う」といったキーワードが複数の学生から挙げられていた。

一方で郊外を選択した学生からは、「家庭的な雰囲気を大切にする」「一人ひとりに寄り添う」といったキーワードが複数の学生から挙げられていた。

3-4. 園の特徴

園の特徴として、都市部を選択した学生では、「園庭内に木を植え自然と触れ合える環境づくりがなされている」「家庭的な雰囲気のなか、一人ひとりを丁寧に」「異年齢保育を行う」「畑があり、春に種を植え、秋に収穫を行う」「芋ほりや野菜の収穫体験を行う」「消防署や警察署と連携して避難訓練を行う」「たくさんの自然に囲まれ、豊かな自然に触れる」「自然の変化に気づくようにする」「土曜保育、延長保育、早朝保育を行う」「英語で遊ぶ」「感性豊かな子ども」などがキーワード、キー概念として記述されていた。特に自然と触れ合う機会の提供については、6名が園の特徴として挙げていた。また、園児数については、記述されているものによれば、60名～115名程度の中規模な園を想定していた。

また、郊外を選択した学生についても同じく、「自然とのふれあい」「限定的な異年齢保育」「地域との連携や園外保育」「豊かな自然とのかかわり」「感性豊かな子どもたちを育てる」であった。理想の保育施設像の園を構成するキーワードやキー概念については、都市部の保育施設をイメージした学生も、郊外の保育施設をイメージした学生も大きな差は見られなかった。また、園児数については89名～114名と、特に園児数を記述している場合、こちらも中規模な園が想定されていた。

3-5. 園の見取図

園の見取図についても、都市部の保育施設を想定したケースと郊外の保育施設を想定したケースにおいては大きな違いは見られなかった。園の見取図としては1つが2階建てを明記しているのみで、他の18園については1階建ての平屋構造の園を想定していた。園舎の形としては、直線の廊下とその左右がどちらかに保育室が配置され、廊下の端に遊戯室や給食室等が配置される「直線」型が2園、基本的には「直線」型と同じ配置だが、園舎が園庭を囲むよう扇形になり、有機的な形となっている「変形直線」型が1園であった。四角形の敷地のうち2辺に沿って園舎が作られ、L字の形となっている「L字型」が9園、コの字の形で園舎が作られ、園庭を園舎が三方から囲む形となっている「コの字型」が6園、中庭がある「ロの字型」が1園であった。園舎全体の形として特殊なものは見られなかったが、園舎内の部屋の配置についてはそれぞれ工夫がみられるケースがあった。たとえば、「園舎内に広い空間があり、そこが多目的ホールとなっている」「すべての保育室からほぼ同じ距離になる中間地点に、絵本室が用意されている」「図書室がある」「ランチルームが円形になっている」「道路とは反対側に園庭が設置されており、道路側からは園舎の

ために園児の様子が見えないようになっている」「異年齢保育を行う 3～5 歳児は巨大な一ホールとなっている」などの工夫がみられた。また、「一時預かりのための保育室」、「足洗い場」、また 0 歳児の保育室に隣接する形の「調乳スペース」「沐浴スペース」など、保育施設に必要な施設・設備を具体的に想定しているケースは 7 園であり、残りの 12 園については保育室と職員室、遊戯室、トイレなどの保育施設のアイコン的なもののみが想定されていた。

3-6. 年間行事など 一年の生活の流れ

この項目についても、都市部の保育施設と郊外の保育施設において大きな違いは見られなかった。入園式や母の日、父の日、プール開き、七夕、運動会、クリスマス会、餅つき大会といったアイコン的なイベントはすべての園で共通して見られた。一方、数が少なかったものでは、「(5 月)田植え」「(5 月)芋のつる植え」「(7 月)デイキャンプ(年長児)」「(11 月)卒園旅行(年長児)」「(11 月)七五三」などであった。行事については特徴的なものよりも典型的なもので構成されているケースがほとんどであった。

また特記事項としては、「月に一度、終日異年齢保育を行う」、「クリスマスや餅つき、節分では地域の方々の手伝いを得る」、「近隣の施設で合奏などを行う」「大掃除への参加」、「ピラミッドメソッドの導入」、「英会話」(2 園)、「リトミック」、「給食は旬のもの、安全なもの、和食中心」などが挙げられていた。これらについても、都市部を想定したケースと郊外を想定したケースで大きな違いは見られなかった。

4. 考察

学生による理想の保育施設像からは、以下の特徴がみられる。まず一つ目に、保育所もしくは幼保連携型認定こども園が想定されている点である。特にほとんどが保育所であった。これは、この課題が保育実習指導Ⅱの授業内で行われたことが関係していると考えられる。また、認可外保育所や院内保育の場については自主実習も含めて実習を経験する機会もあまりなく、また就職の際にも関わる機会が少ないため、実態が想像しにくかったからではないかと考えられた。

二つ目に、都市部と郊外について、それぞれを選択した学生数はほどよく分散したものの、理念や内容、園の見取図や園の行事などにおいて、特に両者に大きな違いは見られなかった点である。三つ目に、キーワードやキー概念として用いられている言葉はある程度共通していた点であり、全体として「自然との関わり」「地域との連携」といった抽象的なスローガンのもので、具体的な手法や取り組みについてはほとんど記述されていなかった。これらの二点について、まず、今回都市部と郊外の選択肢について、両者の定義や具体的な違いについて説明しなかったため、学生は自身の判断で都市部か郊外かを判断しており、実際には想定している都市部や郊外のイメージは明確には分かれていなかったのではないかと考えられる。

これらの理想の保育施設像に関するレポートから明らかになったことは、学生一人ひとりの違いから、理想の保育施設像の特徴についても多様なものとなることを想定していたが、結果としては「自然とのかかわりの重視」「地域とのかかわりの重視」といった似たものが多くを占め、園の環境構成や行事予定も含めた内容についても、典型的な保育施設としての要素が多くを占めたということであった。

しかし、上記のように比較的抽象的で典型的な記述がみられる一方で、園の理念や特徴、園の見取図や行事内容として記述されているもののうち、具体的かつ典型的でないものを記述しているケースがいくつか見られた。そして、これらの具体的な記述については、特に学生が2年間の授業や実習の中で体験したであると考えられるものが多く含まれていた。たとえば、ある園の特記事項にて述べられていた「近隣の施設で合奏などを行う」については一これを書いた学生自身はそのゼミナールに所属していたわけではなかったものの—2年次の専門ゼミナールにおいて一部のゼミが近隣の施設等へ合奏に行っていたケースがモデルとなっていると考えられた。また、ある園の見取図において書かれていた調乳スペースや沐浴スペースについては、それを書いた学生が実習を行った園が、配置や保育室と比較したサイズ感などからモデルとなっていることが推測される。このように、理想の保育施設像として具体的にイメージされているものについては、明確なモデルがあると考えられる。

5. おわりに

本研究では、園舎などの物理的な保育環境も問い直しの対象とした新たな保育理論・実践の流れをふまえ、保育者養成校の学生が考える理想の保育施設像について、学生のレポート課題を通して検討した。そこで、理想の保育施設像といっても、具体的な実践の姿というよりも、抽象的な表現が用いられ、また保育のアイコン的な、典型的な要素が多く含まれていたりするものが多くを占めていたことが明らかとなった。言い換えれば、授業実践としては理想の保育施設像について考えることで現在の保育について批判的に問い直す、という段階には至らなかったことが明らかとなった。一方で、そのような中においても、具体的な姿や典型的なものや画す特徴として記述されたりしているものは、その学生やその周囲の学生が学内外の学生生活の中で体験したものがモデルとして反映されていると考えられるケースが多いことが明らかとなった。つまり、よりよい保育を希求し、現在の保育を問い直すための理想の保育施設像についての全体を通した具体的で明確なイメージを持つためには、在学期間中に学内外での学習や自主実習も含めた実習によって多様な保育施設に触れ、また授業のほかに課外活動も含めた多岐にわたる様々な体験を蓄積している必要があることが明らかとなった。

今回、筆者らが保育実習指導Ⅱの授業内において理想の保育所像についてグループワークを行ったのは、現在の保育実践の単純な再生産ではなく、自身の保育哲学・思想に基づ

いて積極的に理想を追求し、そのイメージを明確化することを目指していたからであった。これらの保育における物理的環境の再構成の議論と実践を行うには、現状を批判的に考察し、新たな環境構成をつくり出していくという保育者としての専門性とその前提として不可欠と考えられている。その前提となる専門性を構成するものは、「体験したことによって知っていること」がその基礎であり、専門性を育成するためには具体的な体験を積み重ねていくことが不可欠であることが考えられた。一方で、短期大学における2年間という限られた時間の中で、また多様な背景を持つ学生たちを対象に、カリキュラム及びカリキュラム外の学生の活動をいかに設計するかについては今後の課題としたい。

付記 本稿は、分析対象の全学生に対し了承を得たうえで分析を行ったものである。

参考文献

- 秋田喜代美監修・編著(2016)『秋田喜代美の写真で語る保育の環境づくり』、ひかりのくに。
- 伊藤喬治(2016)「ノルウェーの幼稚園における物理的環境の構成とレッジョ・エミリア・アプローチの受容に関する一考察 ―保育/幼児教育の現代的課題とエリ・ソルベルグセンの理論を中心に―」『三重県幼児教育研究会紀要』創刊号、pp.30-43、三重県幼児教育研究会。
- 菊野春雄・菊野雄一郎・李琦・山田悟史(2018)「教師を目指す学生の理想的教師像に及ぼす性格的要因」、『大阪総合保育大学紀要』12、pp.63-72、大阪総合保育大学。
- 仙田満(2016)『こどもの庭 仙田満+環境デザイン研究所の「園庭・園舎30」』、世界文化社。
- 鳥丸佐知子(2019)「保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか ―「理想の保育者」を目指して―」、『京都文教短期大学研究紀要』57、pp.23-31、京都文教短期大学。
- 宮里暁美監修(2018)『～主体的・対話的で深い学びへと誘う～0-5歳児 子どもの「やりたい!」が発揮される保育環境』、学研。
- 山鹿貴史・寺尾謙(2019)「幼児教育系短期大学生が持つ理想の保育者・幼児教育者像に関する一考察:マインドマップの分析から」、『八洲学園大学紀要』15、pp.45-58、八洲学園大学生涯学習学部。